

まごころ通信

教育長コラム

「研修の場をひらく ～おだわら未来学舎②～」

本市では、「社会力」を教育の柱に掲げていることは、これまでも色々な機会に取り上げてきました。社会力とは、子どもたち一人ひとりが自分を輝かせて充実した人生を送り、より良い地域社会を創る力です。「人・もの・こと」と関わり、自分を高め、共に高め合うことで育成されます。

子どもたちがこの力を伸ばしていくためには、教師が教育以外の事柄に目を向け、人間力（感性、心に感じて思う力）を自ら高め、人としての幅を広げていくことが必要です。

そうした中で、おだわら未来学舎では例年、教育関係者以外の第一線で活躍されている方の講話も実施しています。

○(株) オリエンタルランド

徳田 祐一郎氏

『東京ディズニーリゾートをささえるホスピタリティ』(H27)

○ヤマトホールディングス(株) 相談役元社長

瀬戸 薫氏

『クロネコヤマトの満足創造経営』(H28)

○フォトグラファー(世界初の女性K2登頂者)

小松 由佳氏

『K2への登頂』(H29)

○俳優 合田 雅吏氏

『役者として伝えたいこと』(R1)

○パティシエ 鎧塚 俊彦氏

『パティシエとして大切にしていること』(R2)

○ホスピタリティー・コーディネーター

朝岡 万吏江氏

『接客マナーや接客のためのコミュニケーションについて』(R3)

と、様々な職種の方をお願いしています。

令和5年度は小田原市出身の落語家 柳家三三氏をお招きしました。(令和5年7月18日)

三三氏は、城山中学校を卒業して、落語家になりたいと師匠に弟子入りを志願しましたが、「高校くらい出てこい」と突き返されてしまいました。その後、小田原高校を卒業し、再度門を叩きようやく弟子入りを許されました。それから人一倍修行をして真打になりましたが、落語の奥深さを日々実感しているといいます。

講演で三三氏は、落語家は一人で何役もこなす。客を見ながら決まったセリフを話すのではなく、雰囲気・時間配分・言い回しを調整し、空気を読むことが重要。聞き手が分かる声の速さと大きさを意識する。例えば、野球では「より早く、正確に、より遠くへ、より強く」を求めるが、「うまいけど面白くない。」「下手だけど面白い。」があるのが落語の面白いところ。聞いている人以上に自分が想像することで、ワクワク感を客に与えることができる。落語家は、話芸や動作によって聞き手に想像させる。客が、「分かった。想像できた。」と感じ取ることができる。つまり、「自分の力で楽しめた。自分の力で理解した。自分でそこにたどり着いた。」にすることと語られました。

参加者からは、授業者がまず楽しんで、イメージすることが大切。聞いている人(子どもたち)がどのような状況なのか空気を読むこと。(裏面に続く)

その場で子どもに合わせる即興性を持つことが大切。
子どもに想像させる授業作り、教師も子どもと楽しみながら授業に臨みたい。などの感想が寄せられました。

聴く耳を持ち、他の職業人や自分以外の人々から学び、それを自分の血肉とできる教師こそ、真の教育者だと私は思います。

小田原市教育委員会教育長



柳下正祐

市立幼稚園について

小田原市には、現在5園（酒匂・東富士・下中・矢作・報徳）があり、4歳児5歳児が就園する2年保育となっています。

※下中幼稚園については、令和8年度から橋地域認定こども園に統合予定です。



地域

市立幼稚園は、地域に開かれた幼稚園として、地域の方との交流や連携を大切にしています。

また、子ども同士の交流や職員の連携・交流などを通じて互いを知り、理解し合いながら教育のスムーズな接続ができるよう取り組んでいきます。

保護者

小・中学校

* ようちえん DE 遊ぼう *

市立幼稚園では「ようちえん DE 遊ぼう！」（園庭開放）を行い、地域の就園前の親子を対象に幼稚園で遊んでいただく機会を設けています。各園によって日程等が異なるので、ご興味のある方は子育てカレンダーをご覧ください。各園 HPをご覧ください。

